

日本におけるレファレンス教育の開拓者

フランシス・チェニーに関する一考察

前川和子*

はじめに

第二次世界大戦後に慶應義塾大学に設立された日本図書館学校 (Japan Library School: JLS)¹⁾ に、チェニー (Frances Neel Cheney, 1906-1996) は招待教員として来日し、1950から1951年にかけてレファレンスサービスを教えた。日本のレファレンスサービスは彼女から始まったとギトラー²⁾、阪田³⁾ が述べているが、日本におけるチェニーの教育活動や彼女の生涯の詳細についてはあまり知られていない。本稿では、チェニーの全体像を捉えることを試みた。

チェニーは日本図書館学校の初代ディレクターのロバートL.ギトラーに來日を依頼された頃、ジョージ・ピーボディ大学 (George Peabody College) でレファレンス科目を担当していた。なお彼女が日本で職務を果たし帰国した後、この大学に藤川正信、長澤雅男らが留学している。藤川は戦後、情報検索等の分野で活躍した人物であるが、日本図書館学校でチェニーの講義の通訳者として、英語で講義したチェニーと受講した学生たちの橋渡しをした。また長澤はレファレンスサービスの専門家として後に数々の図書を著し、それらは現在もレファレンスの教科書等として使用され多くの影響を与えている。藤川も長澤も戦後日本の図書館界の中心にいた人たちである。

チェニーがレファレンスサービスを学んだ時期は、イサドア・マッジ (Isadore Gilbert Mudge, 1875-1957)⁴⁾、マーガレット・ハッチンス (Margaret Hutchins, 1884-1961)⁵⁾ らによってレファレンスサービス論が確立された時期であり、チェニーはコロンビア大学でハッチンスからレファレンスを学んだ。1960年代にはケース・メソッドがレファレンス教育に応用された出版物がみられ⁶⁾、新しいレファレンスサービスの教育方法が模索された時代であった。日本ではS.ローススティーン (Samuel Rothstein, 1921-) のレファレンスサービス論 (1955年)

* 桃山学院大学兼任講師、大阪大谷大学人間社会学部准教授

が有名であるが、日本で翻訳が出版されたのは1979年である。⁷⁾ チェニーのレファレンスの代表的著作に Fundamental reference sourcesがある⁸⁾。

1. 誕生からピーボディ大学入学, 図書館員, 教員へ

1906年8月19日トーマス・ミークス・ニール (Thomas Meeks Neel) とキャリー・(タッカー)・ニール (Carrie (Tucker) Neel) の娘として、ワシントンD.C.に生まれた。両親とも生まれは南部である。幼少のころは、ジョージア州フィッツジェラルドで過ごした。つづいてペンシルヴァニア州ピッツバーグ、サウスキャロライナ州ニューベリーで暮らし、1920年ニューベリー・ハイスクール (1920-1924) に入学した。

1) 学生時代

1924年ヴァンダービルト大学 (Vanderbilt University) に入学し、学生生活を送ることになる。在学中の1925年秋から、図書館の学生アシスタント (student assistant) として働いた。1928年6月ヴァンダービルト大学からBachelors Degree in Sociology (社会学士) を受け卒業した。大学在籍の10代のころ、フランシス・ニールはブレイナード・チェニー (Cheney, Brainard 1900-1990) に出会い、1928年6月21日、彼女が卒業した1週間後にテネシー州ナッシュビルで結婚した。夫のブレイナードは小説家、文芸評論家、政治記者、スピーチライター、劇作家として40年に及ぶ作家生活を送った人で、一時期*Nashville Banner*の政治評論家 (police reporter) であった。南部の色濃い20世紀作家であるフラナリー・オコナーらとの親交でも有名である⁹⁾。

2) 図書館員時代

卒業した1928年にヴァンダービルト大学図書館の科学図書館で正規の図書館員として働きはじめ、1929年に貸出部に移った。1930年には同大学図書館内のレファレンス部門に移り、レファレンス部門のヘッドとして7年間勤めることになる。1937年にヴァンダービルト大学は、ジョージ・ピーボディ大学 (George Peabody College), スカリット大学 (Scarritt College) と合併するが、チェニーはジョイント・ユニバーシティ・ライブラリー (Joint University Libraries: JUL) のヘッド・レファレンス・ライブラリアンとして1943年まで働いた。

3) ピーボディ図書館学校

上記図書館員時代の1930年から1937年の間、チェニーはピーボディ図書館学校のパートタイム学生であった。またこの間、ヴァンダービルト大学大学院で英語、歴史、ラテン古文書学を学ぶ。1934年夏ジョージ・ピーボディ教育大学 (George Peabody College for Teachers) から図書館学士 (Bachelor of Science Degree in Library Science) を受けた。

4) シカゴ大学大学院図書館学校とコロンビア大学大学院図書館学校

彼女は1937年シカゴ大学大学院図書館学校 (Graduate Library School, University of Chicago) の夏期コースで学んだ。また、1938年9月から1939年6月までの1年間、コロンビア大学図書館学校 (School of Library Service, Columbia University) でも学んだ。このとき、ハッチンスからレファレンスサービスを学んだ。チェニーは、彼女から主に2つのことを教えられた。1つは、レファレンスとは利用者援助であり、図書館員のほうから積極的に手を差し伸べることであること、2つ目は二次資料の作成である。二次資料で不足する資料があれば、図書館員が自ら作成することをである。これはレファレンスブックスが十分でなかった1920-1940年代の図書館員の仕事の特徴であった。ハッチンスは、もと図書館員で、しかも優秀な図書館員であった。「彼女は、鋭い感覚、広い興味、すばらしい知識、レファレンス・マテリアルとよぶものを持っている。新しい観点を捉えるすばやさ、よき常識、よき判断力があり、とても働き者だ」¹⁰⁾と評された。チェニーは、ハッチンスが教員になった初期のころに教えた学生の一人であった。チェニーは書いている、「マーガレット・ハッチンスは、素晴らしい申し分のない教師でした。もっとも彼女は難しい試験で学生たちを悩ませましたけど。彼女は教えることに関して公正であり、講義はきちんと整理され明解でした。ミス・マッジ¹¹⁾が退官した後、彼女のあとを引き継ぎ、ミス・マッジの支援無しで周到なレファレンスワークを行いたいという望みを持って、学生たちを鼓舞したのです。彼女はまた静かで控え目で、立ち居振る舞いで快活な人でありました。」¹²⁾ マッジは1911年からコロンビア大学図書館に入り、大学図書館に参考調査を定着させた人である。コロンビア大学では1887年から学部レベルの図書館学科が始まり、1926年から大学院図書館学科となったので、ここで彼女は参考調査を教えた。1941年にマッジは引退し、二人の優秀な女性が後を継ぐことになる。一人はハッチンスであり、もう一人はウィンチェル (Winchell, Constance Mabel, 1896-1983) であった。ウィンチェルは Guide to Reference Books で日本でも有名な人物である¹³⁾。

ハッチンスのレファレンス手法は、発見的手法として知られている。すなわち、資料のタイプと具体的主題によって質問を分類する方法で、近代米国のレファレンス・ライブラリアンの基盤となる手法として利用され続けている。この手法を日本でチェニーが伝えた。現在でも多くの講義で教えられているものである。1940年チェニーはコロンビア大学から図書館学修士 (Master of Library Science Degree) を受けた。このことは、彼女が結婚後12年間仕事・勉強を続けてきた成果であった。

5) ピーボイディ図書館学校教員

1941-1943年、1945年、ピーボイディ図書館学校の非常勤講師の身分で教えた。1942年11月から彼女の代表的な仕事となった Wilson Library Bulletin¹⁴⁾ のコラム記事 “Current Reference Books” の連載が始まり、引退する1972年まで30年続いた。

6) 米国議会図書館 (Library of Congress: LC) 時代 (1943-1945年)

1943年、ブレイナードがワシントンDCへ行くことになった。彼はテネシー出身の上院議員トム・スチュワート (Tom Stewart) のもとで、第二次世界大戦中働いていたのである。チェニーもアラン・テイト (Tate, Allen 1899-1979)¹⁵⁾ によばれ、1943年から1944年に議会図書館詩部門チーフ・アシスタントとして勤務した。彼女はテイトが編集者であるLC発行の主要な書誌作成に関わった。後年テイトは、書誌 Sixty American Poets¹⁶⁾ は実はチェニーが作成したのだと告白している。2人の友情は、彼が亡くなる1979年まで続いた¹⁷⁾。

彼女は、1944-1945年にLC一般参考・書誌部門で書誌作成者として働いた。

このLCでの書誌作成の経験は、日本での教育に生かされたようだ。彼女は、日本図書館学校で学生に参考図書の問題作成の実習を行わせた。問題に使用した参考図書のリストは、当時LCが持っていた日本コレクションを基礎としていた。書誌事項は日本語と英語で記され、問題は英語で作成されている。チェニーと文字幸子が編集し、An Annotated List of Selected Japanese Reference Materials¹⁸⁾ と名づけられた。

1945年にナッシュビルに帰り、1946年までJULのレファレンス部門のヘッドを勤めた。

7) ピーボディ図書館学校教員時代

レファレンス部門のヘッドになった同1946年、ピーボディ図書館学校レファレンスコースで助教授 (assistant professor) の地位を得て、チェニーの本格的な教員生活がスタートした。同時にチェニーは数々の図書館団体に属し、その団体に指導的な立場をとることになる。例えば、テネシー図書館協会 (the Tennessee Library Association)¹⁹⁾ 会長 (1946-1947年)、テネシー地域図書館サービス (Tennessee Regional Library Service) の顧問 (1946-1955年)、1949-1951年と1953-1956年には、Tennessee Librarian²⁰⁾ の編集者であった。1949年、ピーボディ図書館学校の准教授 (associate professor) となり、それは1967年まで続く。

2. 慶應義塾大学図書館学校在職 (1951-1952年)

1951-1952年の18ヶ月間、東京の慶應義塾大学に設立された日本図書館学校の招待教員に就任するため、ピーボディ図書館学校を離れた。これはギトラー (Robert Laurence Gitler, 1909-)²¹⁾ の要請によるものであった。

ギトラーは、日本図書館学校開校を任されたのであるが、その教授メンバーの選考に2つの基準を持っていた。1つは、ある分野での第一人者であること、もうひとつの重要なことは、人格的に立派で献身的な仕事のできる人物という基準であった。レファレンスサービスを専門分野とするチェニーは、ギトラーの基準を十分満たす能力と人柄であったという²²⁾。招待教員はすべて米国人であった。チェニーの他に、テクニカル・プロセス、目録、分類のフリック

(Bertha Margaret Frick, 1894-1975)²³⁾, 児童青少年分野のハナ・ハント (Hannah Hunt)²⁴⁾, 視聴覚資料担当のラーソン (Edgar R. Larson)²⁵⁾, そして, 図書館学校図書室を創るためのフィリス・ジーン・テラー (Phyllis Jean Taylor)²⁶⁾ が最初に選ばれた人たちであった。講義はすべて英語で行われたので, ギトラーは各教授に専属の日本人通訳をつけた。

1) 日本図書館学校

チェニーの講義の専任通訳として, 藤川正信 (1922-2005) が選ばれた²⁷⁾。当時藤川は, 日本図書館学校第1期生の学生でもあった²⁸⁾。藤川はチェニーの第一印象を「温厚で, 威張ったところは全くないオバサンといったようなものでした」と筆者への手紙に書いている²⁹⁾。チェニーの言葉は, アクセントやイントネーションが南部特有のものだった。講義はチェニーが5から8 sentenceごとに切り, 藤川が通訳し, というふうに行われた。南部訛りの言葉を訳すだけでも大変だったが, それ以上に困難だったことは彼女が講義したレファレンスの概念と内容を藤川が理解し, 受講者に伝えることであったという。レファレンスワーク, レファレンスサービスは, 図書館思想としては戦前すでに移入され³⁰⁾, 参考資料, 参考文献という日本語表現も存在していたが, 日本の図書館のサービスとしてまだ確立されていなかったからである。チェニーは, 図書館の業務がサービスであることを教育した。

2) 文部省主催第2回図書館専門職員指導者講習会

同時期1951年に, 文部省第2回図書館専門職員指導者講習会が, 慶応義塾大学文学部日本図書館学校で行われここでも彼女は教えている。講習会の期間は7月23日から8月31日までであった。当時神戸市立図書館が参考業務を始めていた (1949年から)³¹⁾ が, その図書館館長志智嘉九郎 (1909-1995)³²⁾ も, この指導者講習会に参加していた。レファレンスサービスの経験のある志智は, チェニーの講義が他の受講者より理解できる土壌をもっていたといえるだろう。彼は著書『レファレンス・ワーク』の中で次のように書いている³³⁾。

Referenceというものが, 図書館の不可欠の, serviceであること, そしてlibrarianshipの根本をなすものがservice精神であること, これを彼女は身を以って受講生に示した。彼女はreferenceを講義したのではなく, 身を以ってlibrarianの在り方, ことにreference librarianの在り方を示したのである。

チェニーは, 専門職として今後の図書館を担う青壮年を前に, 米国の図書館学を教えた。何よりも, 今まで日本ではほとんど注目されていなかった, 図書館の仕事がサービスに支えられるものであることを教えたのであった。彼女によって具体的に説明された図書館サービスは, 利用者である市民に知識と情報の利益をもたらす, 受講生自身を専門家として高めるものである。チェニーの知識と経験を吸収することの重要性を, 実感した受講生は多かったに違いない。この時米国における第一線の各種図書館サービスが日本に持ち込まれたのであるが, 各科目についての成果がどのようなものであったかの検証は今後の課題であると思われる。そのなかで

ヤングアダルトサービスを専門とする半田は、「1951年に慶応大学で行われた図書館指導者講習でハナ・ハントによるヤングアダルトサービス論および資料論の講義が行われたが、これもすぐには国内での実践には結びつかなかった。」³⁴⁾とのべている。それに比べレファレンスサービスは、この講習会の後、志智の存在によって、志智を通じて日本の公共図書館に知られていくことになる³⁵⁾。

3) チェニーの影響としての慶応義塾大学図書館レファレンス・ルーム

慶応義塾大学図書館にレファレンス・ルームが1952年（昭和27）に設置されたが、図書館自らの努力とともにチェニーの影響があった。図書館では目録室を改造してレファレンス・ルームを造ったが、その動機は図書館学科のレファレンス・ルームが図書館内にあり、いつもそれを利用していたためである。館内では反対意見もあったが、前述の1951年文部省主催「第2回図書館専門職員指導者講習会」が慶応義塾大学で開催されたとき、同図書館から10名が参加し、チェニーのレファレンスを受講し、その指導の下にレファレンス・ルームの必要性を認識するに至ったという。チェニーのワークショップでは、以下のような指導が行われ、その結果実現した。

図書館内の実際の問題で論ずるということから、慶應の図書館にそうした施設があるほうが良いかどうかから始まって、作るならどんな資格の司書が適当であるか、どんな図書を置くべきか、という風に進んで行き、とうとう「大学図書館における基本参考図書目録」作成という具体論になってしまった。反対論者もいたグループをこの様に指導して行ったチェニー教授の手腕は買って良い。幸いレファレンス・ルームの設置に野村館長も反対しなかったので、ぐんぐん計画が実現にまで推しすすめられた³⁶⁾。

レファレンス・ルームの発足は1952年9月で、最初のレファレンス・ライブラリアンは、同年3月に図書館学科を卒業した井出翁、補助は毛利信吾であった。小規模ではあるが他の私立大学にさきがけたレファレンスサービス実施の先鞭をつけるものであったと評価されている³⁷⁾。

チェニーが日本に滞在し教育を行った期間は、彼女のながいキャリア中ではほんのわずかな期間であったといえる。この短い期間中にチェニーは、慶応義塾大学日本図書館学校における講義のほか、国立国会図書館³⁸⁾や私立大学協会³⁹⁾に招かれ講義・講演を行っている。また、好奇心旺盛な彼女は、忙しい時間の合間を縫って日本の伝統文化に触れ楽しんだようだ。

3. 帰国（1952年）から引退（1975年）、その後

帰国後は、ピーボディ図書館学校の学内外で活躍し、またさまざまな役職を務めている。彼女の活動内容を、レファレンスに関する活動、その他の活動、そして学内での活動にまとめる。

1) レファレンスに関する活動

1955-1962年にかけて、アメリカ図書館協会（American Library Association以下ALA）レファレンスサービス部門公共図書館レファレンス調査に取り組んだ。Beta Phi Mu International Library Science Honor Society⁴⁰⁾ から、1959年に教育における貢献を評価されて第1回Good Teaching賞を受けた。1959年秋、日本人図書館司書を対象とする図書館レファレンスサービス分野のU.S.フィールド・セミナーの顧問をつとめた。これはALAが主催したU.S. Field Seminar on Library Reference Services for Japanese Librariansで、各館種から9名の図書館員が参加し、2ヶ月にわたってアメリカ各地で見学・討論会が行われた。これを契機に日本の図書館において、レファレンス活動に対する認識が急速に高まったと考えられると藤野幸雄は述べている。⁴¹⁾

1960-1961年にALAレファレンスサービス部門の会長（president of the ALA's Reference Services Division）になり、1962年にはALAレファレンスサービス部門から、レファレンスの専門家としての栄誉であるイサドア・マッジ賞（Isadore Gilbert Mudge Citation for Distinguished Contributions⁴²⁾）を受けた。

著作活動としては1963年に、Bulletin of Bibliographyの巻頭ページに巻頭問題記事を掲載した⁴³⁾。そして1970年代にThe Sunday Tennessean Newspaperに数多くの書評を寄稿している。「はじめに」で紹介したカルヴィンのレファレンスサービスのケーススタディ集⁴⁴⁾に序文を書いている。しかし、永年にわたり執筆を続けたWilson Library Bulletinの月刊コラム記事“Current Reference Books”の編集者を1972年6月に引退した。約30年間に解説したレファレンス資料は5,819冊にのぼった。彼女がレビューしたレファレンス資料は、この他にReference Services Review, American Reference Books Annualなどがある。レファレンス資料についての知識の結実といえるものが1971年刊のFundamental Reference Sourcesである⁴⁵⁾。その業績は同誌の記事“Friends Salute the Profession's Number-One Reference Reviewer”において賞賛された⁴⁶⁾。

2) その他の活動

レファレンスの分野以外でも、チェニーは様々な活躍をみせた。1954-1968年までALA評議員をつとめ、1956-1961年はALA運営委員会（Executive Board）のメンバーでもあった。さらに同時期（1956-1957年）アメリカ図書館学校協議会（Association of American Library Schools: AALS）の会長（president）だった。1960-1962年にアメリカ南東図書館協会（Southeastern Library Association）会長とBeta Phi Muの会長であった。1964-1965年には、ALA図書館教育部会（Library Education Division）の部会長をつとめた。

1966年6月マークエット大学（Marquette University）から名誉文学博士号（Honorary Doctor of Letters degree）を授与された。

1970年11月米国南東図書館協会から第1回Outstanding Reference Librarian of the Yearの

称号が与えられた。1972年5月ナッシュビル図書館クラブから、特別表彰をされた⁴⁷⁾。

3) 学内での活動

帰国後すぐの1954年に、ピーボディ大学からGreat Human Issues of Our Timesが刊行されたが、ここに“Books and Reading in the Modern World”という論題で寄稿している。1956-1958年、1961-1963年、1971年には、ピーボディ図書館学校で学長代行 (acting director) をつとめた。1960年にはピーボディ図書館学校の副学長をつとめている。

また1960年から引退する1975年まで、ピーボディ図書館学校、ジョージ・ピーボディ教育大学の連合会長をつとめた。

チェニーは1967年に教授になり1975年まで、ピーボディ図書館学校、ジョージ・ピーボディ教育大学の教授として過ごした。1971年5月にジョージ・ピーボディ教育大学から教育と組織のリーダーとしての貢献を評価されHenry H. Hill賞⁴⁸⁾を受けた。1972年5月には、「ジョージ・ピーボディ教育大学フランシス・ニール・チェニー奨学基金」が学生、教員、友人らの手によって設立された。1975年夏、ジョージ・ピーボディ教育大学から、名誉教授の称号を受け引退した。

4) 引退後の生活

引退後は、彼女の業績への名誉賞や名誉会員の称号を数々受け取ることになる。アメリカ南東図書館協会から、終身名誉会員 (Honorary life membership) の称号 (1976年)、同年the Women's National Book Association for outstanding contributions in the world of booksから、the Constance Lindsay Skinner賞⁴⁹⁾を受けた。また、アメリカの図書館人としては最も栄誉とされているALAの名誉会員 (Honorary membership)⁵⁰⁾ に、Library Educatorとして貢献したとして、1978年1月に選ばれている。贈呈式が同年6月に行われた。他に、南東図書館協会からthe Mary Utopia Rothrock賞⁵¹⁾ (1980年10月) も受けている。

1982年10月18日WPLN-FMナッシュビル・パブリック・ラジオ (Nashville Public Radio) のCoffee Breakという番組で、グリーブス (Edwin S. Gleaves) がチェニーの本について語った。その図書とは、翌年Lexington Booksから出版されるチェニーの記念論文集Reference services and library education: essays in honor of Frances Neel Cheney⁵²⁾であった。

おわりに

わずか18ヶ月の日本滞在であったが、日本におけるチェニーのレファレンス教育における影響は大きかったといえる。チェニーは日本にレファレンスサービスを教え、本稿では彼女の影響の具体例を見たが、さらに詳細に検証される必要があるだろう。また、アメリカ国内におけるチェニーのレファレンス教育への貢献を、数々の賞等が贈られたことによって跡付けた。彼

女は、図書館員を経験し、ピーボディ図書館学校、コロンビア大学大学院図書館学校等に学び教員になった。日本に来た頃は教員になって10年、もっとも意欲的な時期であったと思われる。ギトラーは、彼女を当時のレファレンスの第1人者と評価していた。しかし、戦後期の日本は、アメリカの図書館学を教育する上で言語、資料など、数々の障害があったことは想像するに難くない。彼女はそれらを乗り越えようとした。

日本では短い滞在であったが、その後もチェニーと日本との関係は続いたことがわかる。1つは彼女のいるピーボディ大学に、日本人留学生、藤川、長澤たち⁵³⁾が来て学んだことである。チェニーは、日本で通訳として自分をサポートしてくれた藤川に大変感謝していたようだ。彼が2度目に米国に留学したときも、自宅に招き、家族ぐるみで彼を歓待した。2つ目は、1959年秋ALAが主催したU.S. Field Seminar on Library Reference Services for Japanese Librariansというセミナー実現に努力し、セミナーの顧問をつとめたことである。

チェニーが1972年に榮譽を受けたときには、雑誌の特集記事に藤川もお祝いの言葉を寄せている⁵⁴⁾。日本でレファレンスの出発点としてチェニーが記録されているように、チェニーにおいても生涯日本を忘れないでいたのではないかと考える。

日本における影響力もさることながら、彼女は自国内でレファレンスの専門家として著名人であった。カルヴィンは1965年にレファレンスサービスのケーススタディ書を刊行したが、同書にチェニーの序を掲載している。ALAのイサドア・マッジ賞受賞や、本務校に設立された奨学基金などをみても、彼女が第二次大戦前から1970年代まで影響力のある人物であったことが想像できる。彼女が歩んできたレファレンス教育への情熱は“Encyclopedias”⁵⁵⁾やFundamental reference sourcesに息づき、後者はスウィートランド⁵⁶⁾によって引き継がれている。

引用文献

- 1) 日本図書館学校開設の経緯については、以下の文献が詳しい。
三浦太郎、根本彰「占領期日本におけるジャパン・ライブラリースクールの創設」『東京大学大学院教育学研究科紀要』vol.41, 2002.3, p.475-489.
- 2) Robert L. Gitler; Michael Buckland edited Robert Gitler and the Japan Library School: an autobiographical narrative Scarecrow Press, 1999, 173p.
- 3) 阪田容子「レファレンス・サービス」『図書館ハンドブック第5版』日本図書館協会, 1990, 619p.
- 4) Guide to Reference Booksを編集し、これを図書館の基本ツールとして定着させた。コロンビア大学図書館では、彼女の仕事を直接受け継ぐコンスタンス・ウィンチェル女史を始めとする多くの学術図書館員を育てた。(藤野幸雄編著「イサドア・マッジ」『図書館を育てた人々：外国編 I アメリカ』日本図書館協会, 1984, 216p.)
- 5) ニューハンプシャのランカスター生まれ。Smith Collegeを1906年卒業。在学中は Philosophical ClubとLiterary Societyのメンバーだった。University of Illinois 2-year courseで学び、Bachelor of Library Science degreeを受けた。また、Columbia UniversityからMaster's degreeを取得した。指導を受けた

- Isadore Gilbert Mudgeのあとを継ぎColumbia School of Library Serviceの教員になった。
Introduction to Reference Work, ALA, 1944, 214p.は、ハッチンスの代表作である。
- 6) Thomas J. Galvin Problems in reference service; case studies in method and policy, R.R. Bowker Co., 1965, xix,177p. (Foreword by Francis Neel Cheney)
日本語訳 トマス・J. ガルヴィン；弥吉光長, 前島重方訳『社会と図書館：参考業務問題のケース・スタディ』日本図書館協会, 1970, 253p.
 - 7) Samuel Rothstein The development of reference services through academic traditions, public library practice, and special librarianship, Association of College and Reference Libraries, 1955, ix,124p.
日本語訳 サミュエル・ロースティーン, 長澤雅男監訳『レファレンスサービスの発達』日本図書館協会, 1979, 256p.
 - 8) Frances Neel Cheney Fundamental reference sources, American Library Association, 1971, x,318p.
Frances Neel Cheney and Wiley J. Williams Fundamental reference sources, 2nd ed, American Library Association, 1980, x,351p
チェニーの没後第3版が出版されている。
James H. Sweetland Fundamental reference sources, 3rd ed, American Library Association, 2001, xii,612p.
 - 9) さまざまなジャンルで活躍したが、Brainardは生涯に4つの小説を書いた。Lightwood(1939), River Rogue (1942), This Is Adam(1958), Devil's Elbow(1969)である。ブレナードは、妻Francesとともに、Caroline Gordon, Allen Tate, Andrew Lytle, Robert Penn Warren, Flannery O'Connorと作家仲間であった。ブレナードとFlannery O'Connorとの書簡集が名高い。
The correspondence of Flannery O'Connor and the Brainard Cheneys edited by C. Ralph Stephens, University Press of Mississippi, c1986, xxvii,220p. (Library of Congress Online Catalogをフランシス・チェニーで検索しても同書が検索できる。)
第2時世界大戦後ブレナードは作家、編集者として活動し、1952-1958年にテネシー州知事Frank Clementのpublic relations staffとして働いている。チェニーが日本に行くとき同行しなかったのは、これらの活動の故ではないかと思われる。
 - 10) John V. Richardson Hutchens, Margaret(9.21 1884・1.4 1961) [online]. [cited 2004-2-15] <http://polaris.gseis.ucla.edu/jrichardson/DIS220/mhutchins.htm>
 - 11) イサドア・マッジのこと
 - 12) 前掲10)
 - 13) Guide to Reference Booksをマッジは第6版(1936年)まで編集、第7版よりウィンチェルが編集。日本においても「ウィンチェルのGuide to Reference Books」として大変有名である。
 - 14) Wilson Bulletin. 1(1914/1922) -4(1929/1930) New York
Wilson bulletin for libralians. 5(1930/1931) -13(1938/1939) New York
Wilson library bulletin.14(1939/1940-v.69,no.10(June 1995) - New York, H.W.Wilson
 - 15) 南部Fugitive groupにチェニー夫妻とともに属する詩人。彼の妻はCaroline Gordon。Southern Renaissanceにおいてだけでなく the modernist movement in literatureとしても大きな影響力を持つ詩人・作家であったといわれる。1943年からLCのChair of Poetry。
 - 16) Sixty American poets, 1896-1944,selected, with preface and critical notes, Washington,1945, xii,188p.
(Corporate Name: Library of Congress. General Reference and Bibliography Division. Related Names: Tate, Allen Cheney, Frances Neel)
 - 17) テイトの没後、チェニーは彼の詩についての本を編集している。
The poetry reviews of Allen Tate, 1924-1944 edited, with an introduction, by Ashley Brown and Frances Neel Cheney, Louisiana State University Press, c1983, xii,214p.

- 18) An annotated list of selected Japanese reference materials, Edited by Frances Cheney and Yukiko Monji, Japan library school faculty of Literature Keio Gijyuku University, 1952, 36p.
 注記： 出版： 慶応義塾大学文学部日本図書館学校； 1951年アメリカ議会図書館でまとめられた原稿を増補改訂したもの 別タイトル『日本の参考図書解題』
- 19) テネシー図書館協会にFrances Neel Cheney Award が1982年に設置された。
- 20) Tennessee Librarian: quarterly journal of the Tennessee Library Association. - [Nashville] ; Memphis, TNは1948-2002年, 2002年からTennessee Libraries [electronic resource] となり刊行されている。
- 21) 「彼は初め在任一年の予定で、ワシントン大学から休暇を採って来日した。その時は日本占領軍の招聘によったものであったが、任期中、平和条約の調印によって援助が打ち切られるはめになった。それでは図書館学科の存続はむづかしい。そこでロックフェラー財団からの肩替わりをえる努力をし、彼自身もワシントン大学の好位置を棒に振って、滞在を延期し、学科の基礎確立のために挺身した。そして五年後、藤川正信・中村初雄・浜田敏郎・渡辺茂男の四人の教員を養成し、後遺の憂なく、次の主任橋本孝に席を譲って日本を去った。・・・人生の一番良い、働き盛りの期間を図書館学科の建設のために献身した功績は、高く評価されねばならない。」[伊東弥之助]『慶応義塾図書館史』慶応義塾大学三田情報センター, 1972, 348p.
- 22) 前掲2) p.48
- 23) Columbia library schoolの教員。米国で長年整理技術分野の重要人物の一人と、ギトラーは評価している。Sears list of subject headingsの編集者としても名高い。Minnie Earl Sears (1873-1933) のその第6, 7, 8版の改定を担当した。
Sears list of subject headings, 6th ed. by Bertha Margaret Frick. H. W. Wilson, 1950, xxx,558p
Sears list of subject headings : with practical suggestions for the beginner in subject heading work. 7th ed. by Bertha Margaret Frick. H. W. Wilson Co., 1954, xxviii,589p.
Sears list of subject headings : with suggestions for the beginner in subject heading work. 8th ed. by Bertha Margaret Frick. H. W. Wilson Co., 1959, 610p.
- 24) ロックフォード公立図書館 (Rockford Public Library) からギトラーに請われて来日。児童とヤングに対するサービスの専門家。
- 25) ラーソンは、ギトラーがワシントン大学で視聴覚資料コースを設立しようとした時出会った人物である。彼はLCにもいたことがある。
- 26) 「昭和26年2月図書館学科の図書室を図書館の中に作る」前掲23) の「年表」に記述あり。テラーは、この図書館をつくるためギトラーが選んだ司書である。ギトラーのUniversity of Washingtonの優秀な教え子であったという。前掲1) p.48.
- 27) 松山市生まれ。東京帝国大学法学部政治学科入学、同大学文学部哲学科転入学、同退学、慶応義塾大学文学部図書館学科編入学・卒業 (1951-1952)、ジョージ・ビーボディ大学大学院修士課程入学・修了 (M.A.) (1952-1953)、慶応義塾大学文学部図書館学科教員 (1953-1969)、コロンビア大学大学院招聘研究員 (1961-1962)
- 28) 「藤川先生はその第1期の学生であり、1952 (昭和27) 年3月に卒業された。また英語が堪能であったことと雑学も含めた知識の広さ・深さが評価されて、通訳として創設時の日本図書館学校での教育活動に貢献された。学生と職員という二足の草鞋をはいておられたのである。」細野公男「藤川先生と日本図書館学校」p.23-26.『ある図書館情報学研究者の軌跡：藤川正信先生への追憶』藤川正信先生を偲ぶ会, 2006, 91p.
- 29) 藤川からの筆者への返事。筆者は、当時の通訳の困難さをたずねる質問状を出し、2004年5月14日にお返事をいただいた。
- 30) 以下の論文などでそれがわかる。
 波多野賢一「図書館に於ける参考事務」『図書館雑誌』110, 1929, p.11-19.
 澁谷國忠「参考事務要論 (一)」『図書館雑誌』33 (1), 1939, p.12-15.

澁谷國忠「参考事務要論(二)」『図書館雑誌』33(2), 1939, p52-54, 70.

またこれらの論文は、チェニーの日本図書館学校(あるいは図書館専門職員指導者講習会)での講義に使用された。

- 31) 1948年7月 「神戸市立図書館, 読書相談部電話サービス開始」『近代日本図書館の歩み 年表』日本図書館協会, 1994, 64p.

またインターネット情報資源につきのような記述がある。

「神戸市立図書館沿革」に「昭和23年7月20日読書相談部開設, テレホン・サービス開始」の記述。[引用 2004-9-1] <http://www.city.kobe.jp/cityoffice/57/070/enkaku.html>

- 32) 東京帝国大学中国文学科卒, 興亜院華北連絡部・在北京日本大使館調査官, 神戸市立図書館長, 園田学園女子大学教授

1954(昭和29)年度図書館専門職員養成京都大学講習にて、「レファレンス・ワーク」1単位を担当(15時間)している。

- 33) 志智嘉九郎『レファレンス・ワーク』日本図書館研究会, 1987, p.24. (1962年の覆刻)

- 34) 半田雄二「ヤングアダルトサービスの概況とプログラム(行事)の現状: アメリカと日本の内容比較」『児童・ヤングアダルトサービスの到達点と今後の課題』(論集・図書館情報学研究の歩み: 17) 1997, p.205.

- 35) 1951年以後のレファレンスに関する事項を『近代日本図書館の歩み 年表』前掲31)等から拾うと以下の通りである。

- ・1953年11月26日~28日 公共図書館部会全国研究集会「レファレンス」を開催 於神戸市立図書館
- ・1954年に出版された『レファレンス: 公共図書館における実際』は文部省社会教育局発行の手引書であるが、志智の著作であった。(志智嘉九郎『レファレンス: 公共図書館における実際』文部省社会教育局, 1954, 110p.)
- ・1958年12月3日 公共図書館部会に参考事務分科会を設置
- ・公共図書館部会『参考事務規程』日本図書館協会, 1961, (神戸市立図書館のレファレンスの実践が基礎になっている。志智ほか当時の館員によって書かれた。)

以上のように、戦後のレファレンス・サービスにおける志智の存在は大きい。しかし、『図書館白書 1980: 図書館法30年記念: 戦後公共図書館の歩み』(日本図書館協会, 1980, 19p.)では、戦後期のレファレンスの注目すべき活動の記録はあるが、「ある大都市の館長」として彼の名を記してはいない。そして「しかしこのサービスは“図書館を住民の生活に喰い入らせる有力な手段”となったであろうか。」と記述している。

- 36) 前掲21) .p.239

- 37) 長澤雅男『レファレンスサービス: 図書館における情報サービス』丸善, 1995, viii, 245p.

- 38) 1952年2月25日国立国会図書館図書館長金森徳次郎からチェニーへ講義依頼状が送られ、26日にチェニーから金森に返事が書かれた。国立国会図書館における講義は3月19日に行われ、プリント“Library of Congress. General reference and Bibliography Division.”と「議員図書館におけるレファレンスサービス」が当日配布された。

- 39) 1952年(昭和27)7月4日(金)に大妻女子大学において第五回私立大学図書館研究会が開催され、チェニーは「大学図書館におけるレファレンスワーク」を講演した。

- 40) Frances Cheney wins Beta Phi Mu Good Teaching Award Library Journal 84:110, April 1959

- 41) 藤野幸雄「『日本の参考図書』」『資料・図書館・図書館員: 30篇のエッセイ』日外アソシエーツ, 1994, 206p

- 42) 1958年に設立され1959年より毎年賞を授与している。初年度はMary Neill Barton, 1960年にConstance M. Winchell, Frances Neel Cheneyは1962年の受賞者である。なお、Louis Shoresは1967年、William A. Katzは1973年、Eugene Paul Sheehyは1981年にそれぞれ受賞している。

- 43) Bulletin of Bibliography 24 (May-August 1963) : 1-3

- 44) 前掲6) ガルヴィンの謝辞(1964年)には序文を書いてもらったこととケース法の実験開始の最初から賛成し激賞して頂いたと書かれてある。この序文の肩書きはピーボディ図書館学校副学長になっている。
- 45) "CHENEY, FRANCES NEEL" Dictionary of American Library Biography second supplement, Libraries Unlimited, 2003, xxxv,250p
- 46) Wilson Library Bulletin 47(September 1972) :86-88
- 47) Special citation from the Nashville Library Club
- 48) Henry H. Hillは1945-1961および1966-1967にGeorge Peabody College Presidentを勤めた人物
- 49) 1917年にニューヨークの本屋を経営する女性たちで設立された団体。この会の特徴は、本の世界に関わる仕事、すなわち出版業者、本屋、司書、著者、イラストレーターなどの女性たちがその会員である。現在ボストン、ナッシュビルなど全国9ヶ所に支部がある。1940年にWomen's National Book Association Award (the Constance Lindsay Skinner Award) が設立され、本の世界で功績のあった女性に与えられる。
- 50) "American Library Association's Honorary Member Listing" [online]. [cited 2006-12-10] <<http://www.ala.org/ala/awardsbucket/honorarymembersh/honorarymembers.htm>>
- 51) Southeastern Library Association が1976年Mary Utopia Rothrockにちなんで設立された賞。Rothrockは、米国の南東部図書館の発展に尽くしたライブラリアンである。
- 52) Edwin S. Gleaves, John Mark Tucker Reference services and library education: essays in honor of Frances Neel Cheney, Lexington Books, 1983, xi,306p
- 53) 藤川は1950年にフルブライト留学生として渡米しジョージ・ピーボディ大学に学び、Tennessee州Swyanaのチェニー宅に置いてもらい南部の作家とも知り合いになる機会があったという。また1960年の2度目はコロンビア大学にフルブライト研究員として滞在したが、このときもチェニーとの交流があったということである。長澤は1961年ジョージ・ピーボディ大学院を修了した。
- 54) Friends Solute the Profession's Number-One Reference Reviewer" Wilson Library Bulletin 47(1) (September 1972):86-88.
- 55) Frances Neel Cheney "Encyclopedias" Encyclopedia of library and information science vol.8 Marcel Dekker, 1972, p45-48.
- 56) 前掲8) 2001年刊

(2008年1月29日受理)

A Study about Frances N. Cheney who Introduced Reference Service to Japan

Kazuko MAEKAWA

After World War II, GHQ (General Headquarters) decided to open the library school in Japan for democracy. Robert L. Gitler, the president of JLS (Japan Library school), invited four faculties of library science in U.S.A. Frances N. Cheney came to Japan as a specialist of reference service, and taught reference service and librarianship to Japanese students for 18 months. They were influenced by her, and from then spread reference service in Japan.